

巻 頭 言

2000年4月1日に改組した本研究所も、新しい世紀に入り間もなく一周年を迎えることになる。そして今、研究所の紀要の第1号を上梓する運びになったことは記念すべき出来事であり、慶びにたえない。

この間、新たな研究プロジェクトの策定や、運営上の諸方針、研究所の方向性やあり方など様々な課題についての検討に多くの時間を費やしてきた。現在は、輝かしい将来の発展を遂げるための基盤を築く時期であり、致し方ないであろう。堅牢な基礎もないままに徒に拙速に功を焦ることは学術的な研究にあっては望ましくない。将来への確固たる長期的な展望の下に、地道で着実な進展を図ってゆかねばなるまい。

ところで、人間科学の研究に対して社会からは大きな期待が寄せられている。日進月歩の科学技術の発展とは逆行するように、現代社会には病理的なまでに心の歪みに起因する諸問題が噴出しているからである。このような時代においては、全ての人間の幸福、豊かさ、健康に寄与するような科学的研究を標榜する本研究所の意義は大きい。とりわけ高齢者を初めとして、心身の介護を必要とするような社会的な弱者に対する対人援助の方法に関する研究は今後とも極めて重要であろう。

文部科学省学術フロンティア推進事業の助成を得て、現在、衣笠中央グラウンドの一隅に建設が進められている建物は、創思館と命名され、間もなく竣工する。本学の開学100周年を迎えるにふさわしい記念事業である。ここには心理、教育、福祉などの諸領域の学術的な基礎研究だけでなく、その結果を踏まえて人間生活全般に有効な示唆や実践的な援助を通じて、社会に積極的に貢献してゆくことが要請されている。こうした社会の負託に十分に対応してゆくためには、旧来の視点を越えた新たなパラダイムを構築する必要がある。機械論的な視座からではなく、全体的、統合的な人間観に立った学際的な研究が要請されよう。ヒトゲノムの構造の解明など、生命科学のめざましい活躍により、還元論的な人間観が優位に立つ趨勢の中であって、今こそ改めて「心の本性」に視点を据えた総合的な人間研究が重要であろう。

人間科学研究所所長 斎藤稔正